

談 話 室

第 24 回日本眼科学会専門医認定試験を終えて

第 24 回日本眼科学会専門医認定試験は平成 24 年 6 月 8 日(金)、9 日(土)の 2 日間にわたり、昨年と同様、東京の渋谷駅前のフォーラム 8 で行われた。ここに、昨年 7 月から試験まで 1 年の長きにわたりお世話いただいた関係各位に厚く御礼を申し上げます。

今回の認定試験の概略とその結果、印象などについて以下のとおり報告する。

1. 日 程

平成 24 年 6 月 8 日(金) 筆記試験(フォーラム 8)

午前 9 時 30 分から 2 時間, 一般問題

午後 1 時から 2 時間, 臨床実地問題(視覚素材付き問題)

平成 24 年 6 月 9 日(土) 口頭試問(フォーラム 8)

受験者の所属機関の住所を考慮して午前 9 時からと午後 1 時からの 2 つに分けて各 18 会場に分かれて行った。口頭試問は受験者 1 名ごとに同じ問題を用いて個別に行った。

2. 受 験 者 数

受験願書提出者で受験予定者数は 395 名、欠席 7 名で、最終的に受験者数は 388 名であった。内訳は初回受験者 286 名(73.7%)、再受験者 102 名(26.3%)。昨年は新医師臨床研修制度後、眼科研修プログラム施行施設で研修を修了した医師が初めて受験をした年で、受験者数 386 名、初回受験者 263 名(68.1%)、再受験者 123 名(31.9%)であり、総数に大きな変化はなかったが、今回は初回受験者が増えている。

3. 問題数, 平均点, 合否判定, 合格率

筆記試験問題は例年と同じく一般問題 100 題, 臨床実地問題(視覚素材付き問題)50 題の合計 150 題。KV (key validation)委員会を開催し、正答率と識別指数を参考にしながら問題の妥当性を検討し、全問採点の対象とした。昨年と同様に一般問題, 臨床実地問題をそれぞれ 100 点満点として、両者の合計を加算して 200 点満点として採点した。採点結果を昨年のもので並べて表 1 に示す。

口頭試問については、例年通り試問前日に試問委員全員で実施手順の確認を行った。試問当日早朝に実際の試問の提示を行い、問題内容, 試問方法, 合否判定基準について全員で検討を行った。試験の班によって判定レベルにばらつきが出ないように基準の確認を行

表 1 筆記試験成績

回		一般問題 (100 点満点)	臨床実地問題 (100 点満点)	総合 (200 点満点)
23	最高点	87.9	90.0	170.8
	最低点	27.3	40.0	67.3
	平均点	60.0	70.9	130.9
24	最高点	95.0	90.0	181.0
	最低点	35.0	34.0	72.0
	平均点	68.4	66.9	135.3

い、そのまま各委員は試験会場に配置された。それぞれの口頭試問は 2 名の委員で一つの班を作り、班ごとに会場を用いて試問を行った。試問終了後に両者が合議のうえ不合格判定検討の対象者の選別を行った。合否判定は試問翌日の 6 月 10 日(日)に各班の班長と試験委員会委員長, 副委員長などによる判定会議を開催して行った。口頭試問の問題の評価, 各班の受験者の状況について報告を受け、それをもとに合否判定の基準の確認を行った。その後、口頭試問不合格判定検討の対象者について、班長の報告を受け全員で検討し、合否判定を行った。最終的な合格条件は筆記試験が 200 点満点の 120 点以上、口頭試問で合格の両者を満たすこととした。

今回は合格者 309 名, 合格率 79.6%, 不合格者の内訳は、筆記試験不合格者 78 名, 口頭試問不合格者 2 名(内重複不合格者は 1 名)であった。

4. 初回受験者と再受験者

初回受験者, 再受験者および男女別の合格者数と合格率を表 2 に示す。

例年になく初回受験者の合格率が高かった。一方、再受験者の合格率は昨年と同じであった。過去 6 年間で振り返っても最も合格率が高い試験となった(表 3)。

筆記試験問題は私自身が模範解答を作成してみた感触では、昨年よりやや難しく感じてはいたが、実際には昨年より平均点が 5 点近く上回っていた。今年は、眼科研修プログラム施行施設(基幹研修施設)で眼科研修プログラムを修了した眼科専門医志向者が受験するようになって 2 年目の年である。眼科専門医受験資格として研修初期(最初 2 年以内)において 1 年間以上の眼科研修プログラム施行施設での研修が義務付けられ

表 2 男女別受験者数・合格者数・合格率

	男性	女性	計
初回受験者数	147 名	139 名	286 名
合格者数	129 名	122 名	251 名
合格率	87.8%	87.8%	87.8%
再受験者数	72 名	30 名	102 名
合格者数	37 名	21 名	58 名
合格率	51.4%	70.0%	56.9%
総受験者数	219 名	169 名	388 名
総合格者数	166 名	143 名	309 名
合格率	75.8%	84.6%	79.6%

ている。眼科研修プログラム施行施設での研修内容の充実が初回受験者の合格率を押し上げた可能性があるように思う。

5. 筆記試験問題

筆記試験問題の作成は、70 名の出題委員に依頼。眼科専門医認定試験出題基準に準拠して各専門分野別に分け一人あたり一般問題 5 題以上、臨床実地問題 3 題以上の作成をお願いした。計 571 題の問題が提出され、過去の持ち越し問題 104 題とあわせて 675 題から選定を行った。述べ 6 回にわたる選定とブラッシュアップが行われ、150 題が作成された。この間、担当委員の先生方には金曜・土曜にわたり「缶詰」状態で作業を繰り返し行っていただいた。この場を借りて深く御礼を申し上げたい。

6. 口頭試問

口頭試問は 10 名の試験委員に、1 月に各人 2 題を目途に出題を依頼し、提出された問題と画像の素材をもとに堀田副委員長が 3 題作成し、委員長とともに最終案をまとめた。問題 1 は流行性角結膜炎の症例を提示し、診断に必要な検査や感染予防の対策を問う問題。問題 2 は虹彩ルベオーシスを伴う高眼圧の症例を提示し、診断とともに原因となる疾患を問う問題。問題 3 は角膜知覚計に関する問題と角膜知覚が低下する疾患を問う問題であった。実際に眼科診療を行っていれば

表 3 最近 6 年間の初回受験・再受験別合格率

回	年	初回受験者	再受験者	総合合格率
19	2007	84.8%	51.8%	75.3%
20	2008	76.0%	39.1%	65.3%
21	2009	74.5%	45.2%	60.6%
22	2010	74.3%	23.2%	60.8%
23	2011	81.0%	56.9%	73.3%
24	2012	87.8%	56.9%	79.6%

必ず解答できるものと考えて出題した。実際には、3 問目で角膜知覚計の写真を提示したが、実物をまったく見たことがないと答える者が相当数いた。問題 1 と問題 2 については、ほとんどの者が合格基準レベルか、それ以上の解答ができていた。

7. 今後の試験のありかた

眼科専門医認定試験は 24 回と回数を重ねられるうちによく整備されたシステムとして機能している。

眼科専門医の研修のため眼科指導医マニュアル(平成 20 年度版)、眼科研修医ガイドライン(平成 22 年度版)が発行されている。今年も眼科専門医認定試験出題基準の改訂が予定されている。

毎回、試験委員会で議論されるものの一つに口頭試問の位置づけがある。眼科研修プログラムが適切に運用されていれば、当初の目的の一つであった実際の臨床経験が十分にあるかを評価するという要素は小さくなりつつある。しかし、筆記試験では評価できない面を補う意味で、その存在意義は十分あるというのが実際に口頭試問を担当している大部分の委員の意見であり、今後も継続されるものと思われる。

最後に、日本眼科学会事務局のスタッフの働きに触れたい。資格認定から試験当日の会場での対応など実に細かく受験者のことを気遣ってくれているのを目の当たりにして、試験が毎年無事に行えているのも有能で熱意のある事務局の皆さんのおかげであると実感した。この場を借りて御礼申し上げたい。

平成 24 年 6 月 19 日